

図－43～出羽三山秘所参拝に参加した時のことである。

山形県鶴岡市羽黒町手向の某宿坊が主催した行事のこと、2022(R4)年10月3日(月)月山八合目から西補陀落(羽黒修験の秘所)、雨告山^{あまもり}に向かい、さらには湯殿山スキー場林道止めまで回る山岳^{とそう}抖擻(西補陀落講・10名)に参加して来た。前回の2016(H28)年10月13日(木)から6年振りの2回目である。図－43bは前回、図－43cは今回の状況である。年々変化するのだろう。この行程の三分の二ほどは濃い藪漕ぎであった。

図－44は月山山頂の神社本宮裏手(北側)から西方面・庄内平野を望んだ写真である。西補陀落は矢印の先の谷底にある。そこと雨告山の両方で、神様を崇敬し寿ぐ拝詞(神文)を全員で唱和——広い意味での法楽・声明——した。出羽三山神社に奉仕する手向の宿坊関係者や神職などであるから、神社の神道方式の三山拝詞を奉納するのは当然であるが、神の聖地と称するこの地において、最後に**佛教の般若心経を唱和・奉納した**のである。とてもとてもうれしくなった。前回は唱えなかった記憶がしている。



図－43a



図－43b



図－43c



図－44

ところで、対照的な宿坊を取り上げる。

宿泊年は違うが、手向において異なる宿坊AとBに泊まる機会があった。ある違いに驚いた、接待の良し悪しのことではない。共通点は神仏混淆の祭壇である、中央の仕様・造り・飾りは神道式、その両端と奥に仏教方式、つまり、先代から引き継がれてきた仏像や仏式の祖霊祭壇が並んでいる。いわば上記の宮司の生田家と瀧本家の祭壇と同様（酷似）であった。

そこで違いとは次のようなことである。

Aについて、私は“神仏混淆の祭壇で素晴らしいですね！ 私もこのような祀り方は大好きです。”と話したら、そこの主人Aは口元に指を当て“他言無用、神社関係者には絶対に言わないでください！”とまじめに、かつバツが悪そうに話されたのである。何かを恐れているのか？ びっくりした。

Bについて、玄関を入り荷物を置いたら、ここの主人は、まずは私を祭壇に案内したが、開口一番“私の処（当坊）は神仏混淆です。”とおっしゃられたのである。二礼二拍手一礼を以って拝み終わったら、仏像の入った厨子の前に案内されたのである。そこでは合掌を以って拝礼した。終わったら、祭壇の全部を見てもよいとおっしゃられた。さらには、翌朝の宿泊者が集まった祈祷祭儀では、神道式の法楽の後に、ここでも、般若心経等の仏教式法楽も奉納したのである。“出羽三山はこれではなくてはだめだ”と自噴を覚えた。

.....

自然に宿る精霊に八百万の神を感じ得る日本人は、仏教伝来以降、心の中では神仏の区別なく融合して祀っているのである。B宿坊がとっている祭儀・所作・振舞いは本音と建前に齟齬がない。とても立派なことだと納得・感服した。

それにしても、A宿坊は本音（当坊内での神仏混淆の実情）と建前（神社に奉仕するが故の外向けの厳格な神仏分離の姿勢）を使い分けているかもしれないが撞着・蒙昧しているのであろう。ところが、出羽三山神社は別記したとおり、今でも実質は神仏混淆の神域・霊域となっているのである、しかし、その同社に奉仕・奉斎しているAの当主はこれが分かっているのである。“知行合一ならぬ、知行バラバラ”の「自作ネット包囲リング内での一人相撲」の様相と見えた。人は色々あら～な！の世界であるが。また、そのAは様々な販売書籍に載っており周知の事実と思えることまでも、出羽三山の秘所だとか何とか言って、秘匿姿勢と特権意識を振り撒いているような発言であったが、至って狹隘至極というものを感じた、貴方は、何々は秘密と言うかもしれないが、視界に入らないだけで、知っている人・分っている人は沢山いるのである。

< 所 感 >

本件シリーズ【歴史&宗教 No005】は神仏同座の視点から取り上げて来た。今に残る神仏同座（神仏混淆・神仏習合）の実態に触れるとホットとし安堵感を覚える。これが日本民族の精神を受け継いでいるのだなあと実感する。

(end)